

三股町史料集4

庄内地理志 卷九八

庄内地理志 卷九九

三股町教育委員会

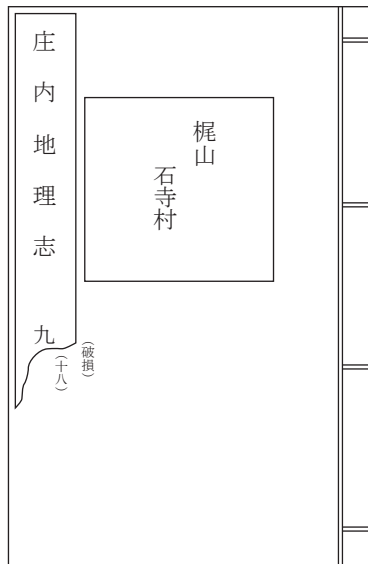


梶山城跡（赤破線が梶山城跡の想定範囲）



都城島津3代北郷久秀・弟忠通の墓（三股町指定文化財、梶山城跡南麓）

(表紙)



(原寸タテ 25.0 cm×ヨコ 16.9 cm)

(書扉)

庄内地理志 卷之第九十八

- 一 石寺本起考
- 一 御検地
- 一 梶山家部
- 一 境縄
- 一 城主地頭
- 一 高麗出陣人数
- 一 戦死之家

卷九八は、梶山かじやまの一分冊目である。梶

山は八分冊あるが、八分冊目は都城市の早水はやみずに関することであり、七分冊目までを順次刊行する予定である。ここでは上

記「書扉」の項目は【】で示し、本文中の項目は「」で追加した。順番は本文の記載順に沿って並べ、頁数を示した。

【石寺本起考】／2

【御検地】／3～6

【石寺村絵図】／7～8

【石寺村田畠字名】／9

【梶山家部】／10～11

【各役人人数】／13～14

【城主・地頭】／15～16・27～28

【城内居住者名簿】／16～17

卷99「小鷹城絵図」(76頁) 対応

【高麗出陣人数】／18

【祁答院大村へ移衆】／18～19

【島原出陣人数】／19

【戦死之家】／20

【元和五年梶山高帳・人数】／21～26

【梶山麓衆略譜】／28～34

榎田・松山・細山田・早田・平川・

伊原木・長倉・二方・久保・谷口・立山

【境縄】／35～70

庄内地理志 卷第九十八

梶山石寺村一

梶山并石寺本起考

梶山之事始ハ勝山^{カチ}ニ而候由、然者地利を以考ニ、是ニ続而勝岡有、前ハ岡、後ハ山ニ而為名付、勝ハ軍戦に勝事を可取候半、然ニ何となく書違、新磯権現江修造之棟ニ加持山と有、又或書ニ加治山と書たるも有、今專用るは梶山也、古ヘハ諸用之文字不定と見得、今用る所之梶山之文字を分チ見る所、梶山之大山之尾ニ而候、木ハ山ニ同じ、然る時ハ木之尾山ニ而、梶山之文字を用候半歟、然ルニ梶山名城下辺を石寺と云、此意を考るに、応永元年之春、今川播磨守貞兼・三州一揆之者共致一味、和田土佐守正覚所守之梶山ニ押寄、太守元久公有御出張、御当家義久公之御二男又次郎忠通、二月十七日之合戦御戦、御舎兄藤次郎久秀公も、三月七日合戦ニ御自身敵ニ強く御当り、数ヶ所御手負ヒニ御目蒙ミ、石上ニ腰を掛暫息を御継候得共、終ニ御果候、然ルニ、後年公腰掛之石之縁ニ依而、此所ニ寺を建立被成たり、依而石寺と名付候半、乍然此已前方石寺之称号有ルも難計候得共、適理ニ符号致候得ハ難捨記ス也、且大昌寺之部ニも委記之

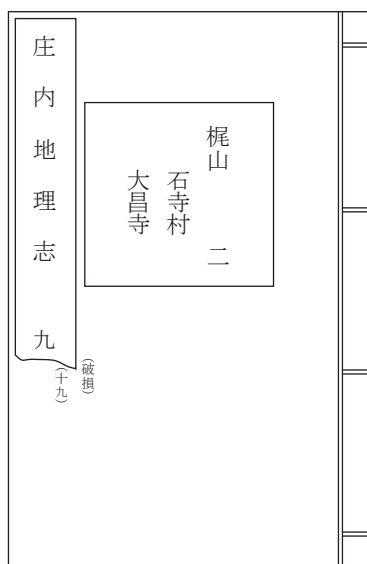
一
梶山獵師札四十、古ヘ完御用之刻獵師狩被仰付、外之人狩仕候儀御法度ニ候、尤札ハ山奉行所方申請候、獵師替合之節ハ、竹木座方以書付山奉行座ヘ申上候、御私領中所之獵師札式百七ツ為有之様古帳ニ見ヘ候

【石寺本起考】

ここでは、梶山地名の考察や石寺名称^{いしでら}の由来が記されている。梶山は初め勝山^{かつやま}で、地勢的に前（西）が勝岡^{かつおか}、後ろ（東）が勝山（梶山）と名付けたとあり、戦勝を想定した地名であろう。その後、書き違えられ（当て字等）、「加持山」や「加治山」ともある。今用いている「梶山」は、大山の尾という意味かという解釈を紹介している。また、梶山城下（南側）の石寺地名の由緒を考察し、応永元年（一三九四）に梶山城で戦死した北郷久秀^{ほんこうひさひで}・忠通兄弟^{ただちち}に関連するものともしている。久秀が戦死する前に腰掛けた石と兄弟の供養寺が建立されたことにちなみ、石寺と名付けられたと。これ以前から石寺の地名があつた可能性もあるが、「庄内地理志」の編集者はあえて記したようだ。

梶山の獵師札は四〇で、古来完御用^{じこよう}以外^{いそ}の狩りは禁止されていた。札は山奉行発行で、獵師変更は竹木座から山奉行ヘ申請が必要であつた。札は都城島津家領全体で二〇七あつたと古帳にある。

(表紙)



(原寸タテ 25.6 cm×ヨコ 17.0 cm)

庄内地理志 卷第九十九

目録

梶山石寺村 二

一 石寺・山之口・勝岡境絵図

一 梶山小鷹城 合戦場 陣之尾 求摩陣

一 大昌寺由緒 世代名

御腰掛石 并 御石塔廟境内画図 大雄庵

一 飯屋 長尾寛右衛門屋敷

一 梶山宗廟新磯権現

一 諏訪大明神

一 南門 一 堀之内 一 大村門

卷九十九は梶山の二分冊目である。表紙に石寺村・大昌寺とあるが、目録を見る限り、内容は多岐にわたっている。

以下では、目録の名称に符合する本文の頁数を示したが、順不同や掲載のない項目があるため補足を行った。

【石寺・山之口・勝岡境絵図】／74～75

【小鷹城絵図】／76

【小鷹城 又雄鷹城】77～78

【合戦場・陣之尾・求摩陣】／78

【満行家】／79～81

【大昌寺由緒】／90～95

【世代名】／99

【御腰掛石並びに御石塔廟】／93～94

【大昌寺境内画図】／92

【大雄庵】／96～98

【飯屋 長尾寛右衛門屋敷】／100

【梶山宗廟新磯権現】／卷100

梶山の宗廟である新磯六所権現は卷一〇〇に項目が立ててあり、卷九十九に記載なし。

【諏訪大明神】／卷100

【南門・堀之内門・大村門】／卷100

- 一 大手之東軍神 祇園^(園)
- 一 彦之權現 天満天神 阿みた 三角園 阿みた
- 一 長谷寺 大手口 釈迦 中園 山之神
- 一 長玄庵敗壞旧跡
- 一 山田門 同天神 地藏 飯屋園門 田上門
- 一 早鈴大明神 一 早馬大明神 一 別納門
- 一 北山権現 一 薬師 一 三方境^(府)
- 一 甲斐元門 一 天神 一 布別符門^(府) 外布別符門
- 一 白山権現 一 北殿城跡付地頭屋敷絵図・由緒
- 市来備前墓 一 津曲筑兵衛地頭屋敷
- 一 切寄御番所 在番人 番主取 小頭 定番人
- 一 辺路番所 各御扶持米
- 一 関所番頭次第
- 御条書
- 一 東目御番所御願之次第
- 一 破損^(銀) 二 付御番所御勉御申分
- 一 鉛煙硝御願 一 貫茅薙敷付
- 一 小路并境筋 一 石伐場
- 一 本村門 一 辺路番所

- 【大手之東軍神】／85 86
- 【祇園】／85
- 【彦之權現・天満天神・丸山 阿弥陀】／85 87
- 【三角園 阿弥陀】／83
- 【長谷寺】／87 90
- 【大手口 釈迦】／82
- 【中園門 山之神】／83
- 【長玄庵 敗壞旧跡】／100 102
- 【山田門 天神】／103 105
- 【丸山 地藏】／102 103
- 【飯屋園門・田上門】／105 106
- 【早鈴大明神・早馬大明神・別納門】／106
- 【北山権現・薬師・三方境】／106 107
- 【甲斐元門・天神・布別府門・外布別府門】／107 108
- 【白山権現】／107 108
- 【北殿城跡付地頭屋敷絵図・由緒】／114 115
- 【市来備前墓】／115
- 【津曲筑兵衛 地頭屋敷】／116
- 【切寄御番所】以下7行分／卷100
- 【小路並びに境筋】／110
- 【石伐場（切石場）】／110
- 【本村門】／110

一 泉水早馬權現	一 小久保門	一 大久保門	
一 荒神 地藏	一 栗巢	一 栗巢門	
一 花谷山之神	一 天満天神	一 田上地藏	
一 山之神	一 細目山之神	一 同 辺路番所	
一 本村観音	一 畠田毘沙門	一 小蔵阿弥陀	
一 久保観音	一 大脇阿みた	一 外中藺門	一 中藺門
一 竹之内門	一 今仮屋門	一 森木門	

【辺路番所（本村門付近）】／110
 【早馬權現・小久保門・大久保門】／110
 【荒神・地藏・栗巢門】／110、111
 【花谷山之神】／111
 【天満天神】／111
 【田上地藏・山之神】／107
 【細目山之神】／112
 【細目辺路番所】／113
 【本村観音・毘沙門・小蔵阿弥陀・久保観音・大脇阿弥陀】／不明
 【外中藺門・中藺門】／113
 【竹之内門・今仮屋門・森木門】／113
 目録にはないが、「満行家」（七九〇八頁）を追加した。七九頁には、満行藤兵衛の妹は唐人（明人）一官の妻とある。一官とは明から渡来した何欽吉（かきんきち）のことで、梶山で和人参（わにじん）を發見したとされる都城の医師である（『三股町史上巻』五四三頁）。

小鷹城 又雄鷹城

内城 本丸 仮屋城 中之丸 取添

当城者 往昔梶山氏築而居城、応永元年迄和田土佐守正寛守之、今川播摩守押寄候处、

(宗家七代島津)

太守元久公御出張ニ而御攻被成、今川氏不及力山東江退、同年より二百余年之間文亀

之頃迄、代々梶山氏之居城歟、然ニ伊東ニ被押領、文亀之頃より天文三年迄之間伊東

領と見へ、八ヶ外城之一ニ而城主稲津・落合也、右和田家・梶山家・伊東家領主之次

第、年間之大概ハ梶山新礪宮・野々三谷諏訪宮棟札之年間を相計、領主年数之大勘右之

如く也、然ニ天文三年甲午閏正月七日勝岡、山之口同前北郷家御領と成而、北郷次

郎右衛門久利を為地頭被召置、同二月十六日梶山・勝岡城祝有之、地鎮者 山内豊前守

義清瓶子をすへ三献有之、初献ハさしみ、二献ハ塩煎、三献ハ雑煎

一

文禄四年伊集院右衛門太夫忠棟入道幸侃江御朱印を被下、一雲入道時久公并幼君長千

代主薩州邪答院

(祈)

江御移、都城・梶山其外幸侃領と成、然ニ慶長四年源次郎忠真十二之

砦を構籠城之時、梶山江八野辺彦一・同金左衛門・谷口丹波・同伊予等梶山城ニ籠、

同九月十日野々三谷合戦之時、梶山・勝岡之軍勢掛続、然とも北郷勢ニ被追立、敗北

而引退、此時梶山諏訪大宮司谷口伊予、於小谷頭上并仲五兼政之首を取逃ルニ、北郷

勢急ニ追掛ニ、首を堂之廻ニ捨而逃 始終事委ハ記野々三谷

同五年二月忠真降参、同廿九日梶山・勝岡・山之口同時ニ皆城を降ル、嶋津中務少輔

(豊久)

忠豊・北郷作左衛門三久主入代而城を受取、元来御当家之領地ニ而本領被返下、都城

を始梶山其外御安堵也

【小鷹城・雄鷹城】

梶山城は、小鷹城、又は雄鷹城ともいい、三つの曲輪が付記されている。

梶山城は樺山氏が築き居城としたとあるが、一次史料では確認できない。応永元年（一三九四）まで和田正覚が守り（梶山合戦では島津方が敗北したもの）、今川方は山東（宮崎平野）へ退去した。その後、二百年余りは樺山氏の居城かとあり、確証はないようである。文亀年間（一五〇一～一五〇四）から天文三年（一五三四）まで梶山城は伊東氏の「庄内八城」の一つで、城主は稲津・落合であった。年代の概略は、新磯神社や野々三谷の諏訪神社棟札等に見られる。天文三年以降、北郷八代忠相が高城を攻略し、梶山・勝岡・山之口を領有し、庄内（都城盆地）統一が開始される。文禄四年（一五九五）、太閤検地後、庄内は伊集院忠棟に与えられ、北郷家は邪答院へ所領替えとなった。慶長四年（一五九九）、忠棟の子忠真によって庄内の乱が起こり、梶山城には野辺・谷口らが籠った。梶山城は戦場にはならず、野々三谷へ援軍を發し、敵将を討ち取っている。慶長五年に乱は終結し、北郷家は邪答院から都城領へ復帰した。